

FD 通信 No. 7

飯田女子短期大学教務（FD）委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

FD 活動と学習成果の PDCA サイクル

教務（FD）委員長 北林ちなみ

授業を実施する上で重要なことは、わかりやすいこと、学生が関心を持って主体的に取り組めること、そして最終的に科目の到達目標が達成され、学習成果を獲得することです。学習成果には、科目の到達目標、領域別到達目標、学科・専攻の教育目標（DP）と段階別にレベルが設定されていますが、最終的には各学科の修業期間での学生の育ちである学科専攻の DP レベルの学習成果獲得が重要であると考えます。学生が各科目の位置づけを明確に理解し、目標に向かって意欲的に学習に取り組めるように、シラバスの見直しやカリキュラムマップの定期的な見直しを行うなど、教員間の意識統一を図ることが必要です。

学生が目標とした学習成果を獲得できるように本学では、授業改善アンケートや公開授業の実施と結果の検討、FD 講演会の実施などの FD 活動を行いました。公開授業において昨年度は各学科・専攻ごとに 2 科目の授業を公開し、終了後の検討会を実施しましたが、今年度は学科内で希望の授業を参観するかたちで行いました。自分が希望する授業を参観することにより、自身の授業を振り返り授業運営や教材改善に取り組むことにつながります。授業を実施した教員も参観されるということにより授業方法の見直しにつながり、お互いにより良い授業のあり方を考える機会となっていると思います。

FD 講演会には多くの教職員の出席があり、FD に対する意識が高くなっていることがうかがえます。講演後のアンケートより、テーマである「学生が学びに向かう動機づけの工夫と効果」について教員それぞれが自分の授業運営などを振り返ったことがわかりました。現在行なっている授業を確認したり見直したりできる機会を持つことで、学生の学習成果獲得へつながると思われます。

授業改善アンケートの実施により、学生の授業評価を実施していますが、結果を出して終わるのではなく、授業内容、方法の改善につなげることが必要です。各教員がシラバスに到達目標や授業内容、評価方法などを明示し、評価内容と評価方法によって出された成績（評価結果）を参考に学習成果の評価を行い、その結果と授業評価の結果、そして、公開授業の実施や FD 講演会への参加などが一連に結びついていき、学習成果の PDCA サイクルを回転させていくような FD の活動を展開していくことが必要であると考えます。

目次

SD 活動と学習成果の PDCA サイクル	教務(FD)委員長 北林ちなみ	ページ 1
＜FD 講演会＞ ～学生が学びに向かう動機づけの工夫と効果～	教務委員 千 裕美	ページ 2
看護学科 米山育子 / 幼児教育学科 菱田博之 / 家政学科 仙波壽朗		ページ 3
＜公開授業＞		
幼児教育学科 及川直樹 / 家政学科 山下紗也加 / 看護学科 矢澤玲子		ページ 4
＜授業改善アンケート＞		
家政学科 熊谷教 / 幼児教育学科 酒井真由子 / 看護学科 登内芳子		ページ 5
キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果	庶務・財務課長 矢澤庸徳	ページ 6

<FD 講演会>

～学生が学びに向かう動機づけの工夫と効果～

去る3月3日に、教職員51名の参加のもと、看護棟多目的ホールで平成26年度FD講演会が開催されました。今年度は「学びに向かう動機づけの工夫と効果」について、ベネッセコーポレーション大学事業部の山品秀人様を講師にお招きし、1時間程度講演をお聞きした後、30分程の意見交換が行われました。

講演では、多くの資料を提示して頂きながら、他大学の現状と大学教育における問題点についてお伺いしました。その後、具体的な動機づけの方法をわかり易くお示し下さいました。さらに、岐阜大学と國學院大学の実践事例についても発表がありました。いずれの大学もカリキュラムや授業における「しかけ（導線）」が工夫されており、その実効的な効果も確認できました。

後半の意見交換では、2～3年間という短期大学の教育課程における課題についての情報も得られ、高校生の現状も踏まえた取組みについてのお話も聞くことができました。

今回の講演会は、本学の教職員が一同に会し、初年度の動機づけの重要性を再認識すると共に、「経験」や「気づき」を短大教育にどう配置するかを考える良い機会となりました。全学でFDの取組みについて考える時間が共有できたことに感謝致します。また、アンケートにご協力いただいた皆様にはこの場をお借りして、御礼申し上げます。
(文責：千 裕美)



主体的学びへの気づきとやる気

看護学科 米山育子



講演では、高校生へのアンケートをもとに、主体的学びへの気づきとやる気をどのように促すかという内容で、次のことが印象に残った。「将来つきたい職業を実現するために学ぶ意欲を持って入学する学生は3割であり、その半数は仮決めの選択である。大学は、専門を学ぶ機関であると同時に青年期の発達を支援する必要であり、学生が体験を通して、自己効力感・自己決定感を持ち、それを後押ししてくれる存在（教職員や一緒に頑張る仲間）が重要である。」体験後は、必ず振り返りを行わなければ「気づき」につながらないという点がポイントで、体験を共有できる仲間や教員とコミュニケーションを持つグループワークはとても大事であると、学びました。また、体験を通してすべての

学生がやる気を持てるとは限らず、主体性に欠ける学生には、信頼関係確立、教員間の連携が重要であると改めて感じました。

学生自身が主体的に学び、行動することの重要性を気づかせることは難しい課題であるが、今回の学びを積極的に取り入れていきたいと思います。

FD 講演会に参加して

幼児教育学科 菱田博之

FD 講演会に参加し、高校を卒業して進学してくる学生の動向を知ることができた。中でも印象に残ったのは、明確な将来像を持って入学してくる学生の中にも、途中で進路を変える者が潜在的にいるということであった。現代の日本においては、基礎学力を身につけるチャンスを逃すということは、よほど家庭や環境の影響が大きいなどの理由以外ではあまりないと言える。その一方で、基礎学力を身につけてきたにも関わらず、将来像が描けない学生が多数を占めていることについて、どのような考えれば良いのだろうか(とは言っても、自分も大学進学時には将来像など描けていなかったもので、全くもって偉そうなことは言えません)。コロンビア大学の心理学者シーナ・アイエンガーは、「人生を決めるのは、運命、偶然、選択である」と述べ、自己決定である選択には“力”が宿るとしている。選択肢が多いほど、そして何にだってなれるという信念がある程、選択しなかった道への未練や後悔、現状に満足ができず、地に足が付かないと考えられる。短大時代が、自分自身を見つめ直し、何が自分自身を形作ってきたのかを振り返る時間となるかどうかが大切であると改めて感じた。今回紹介された多くのデータが、四年制大学のものであったので、短期大学における強みは何かということを講師にお聞きした。回答として、教員と学生とのコミュニケーションの密度を挙げられていた。最近「セレンディピティ」という言葉をよく目にするようになったが、「偶然の出来事から思いもかけない何かを発見する」というような意味である。セレンディピティの語源は昔のスリランカの呼び名からであり、先に述べたシーナ・アイエンガーのルーツはインドである。改めて日本を含めたアジアの価値観を大切にしつつ、短大に進学してくる学生がそれぞれの制約(運命)の中で、何に出会い(偶然)、何を掴み取るのか(選択)について、学生とのコミュニケーションの中で、きっかけを与えることの出来る存在でありたいと感じさせてもらえた講演会であった。

学びに向かう動機づけの工夫

家政学科 仙波壽朗

この一年間、学びへの動機づけを考えていた私にとって、FD 講演会はヒントを与えられる良い機会となった。飯田女子短期大学では資格や就職に直結する学びが多い。その中で、私の担当する被服学はあまりそれらと関連しておらず、多くの学生にとって意欲的に取り組むことは難しいかもしれない。しかし衣服は日常生活に欠かせないものであり、社会や経済にも大きく関係している。今回、FD 講演会で学んだ「成人学習の原理」を取り入れ、学ぶ目的や暮らしとの関係性、学問としての面白さを示し、学びに向かうモチベーションを高めていきたいと思う。

来年度より生活造形コースは家政専攻となり、学生が自由に科目を選択できるカリキュラムとなる。そのため学生はそれぞれ興味のある科目を選び、高い意識を持って講義に臨むことが予想される。それに応えるためにも、今年度の反省と FD 講演会で学んだことを踏まえ、授業に工夫を重ねていきたい。



＜公開授業＞ 公開授業を参観した先生方に、参観後の思いや感想を寄せていただきました。

公開授業を参観して

幼児教育学科 及川直樹

私は、幼児教育学科の専門科目である「創作ダンス（1年・通年）」を参観しました。公開授業日は、これまでの学びをもとに、学生がわいわいひろばでダンスを披露したり、学生の表現に合わせて親子と歌を歌ったりするという内容でした。そのため、参観の内容や、授業後の担当教員との振り返りでは、学生の取り組みが主となりました。特に、今回わいわいひろばで親子の前に立つという経験をしたことは、学生が子どもや保護者からどのように見られているかということ意識するよい機会になったと思います。その上で、ステージ上で表現することの奥深さも学べたのではないのでしょうか。まずは、表現する自分自身が表情豊かに、楽しんで表現しないことには、親子を巻き込んだ活動にはつながりません。活動内容や方法の適切さなどを問う前に、表現体としての自分自身を見つめ直すことが必要なのだと思います。

このような経験が、2年次のエクспレッションにもつながっていくことを考えると、1年次に「創作ダンス」の中で、今回のような経験ができることは、非常に有意義だと感じました。

学生の学びに繋がる授業の工夫

家政学科 山下紗也加

今年度は、学生がより理解する授業の工夫や講義授業が実習授業に繋がることに重点を置いて公開授業を参観させていただきました。学生にとっては難しいまたは興味の持てない授業テーマであったとしても、より学生が身近に捉えられるような工夫により少しでも興味を持ってもらうことがまず授業を始める第一歩であると感じました。私は助手という立場上先生方の授業を拝見する機会が比較的多くありますが、その多くは演習や実習の授業です。それらの授業では、学生が自ら調理や実験、発表の準備などの課題を進めていく必要があるため、勉強をせずに終わらせることはできません。しかし、学生によってその進捗や積極性に差があるように感じられました。様々な要因はあるとは思いますが、演習・実習授業の土台である講義授業での理解が十分にされ、学び得たことを実習授業で生かすことで更なる理解の定着や問題解決能力に繋がり、社会に出たときに実践できるようにしていくこと、この流れを講義授業の時点でも学生に伝えていくことが大切であると思いました。

学生の『考える力』を育む授業

矢澤玲子

現在の看護基礎教育では、看護実践能力を備えた学生の育成が求められています。私は、授業においてもこの看護実践能力に欠かせない状況判断能力や推論能力といった『考える力』を育てたいと考えています。

今回参観させていただいた授業では、学生の『考える力』を育むための多くの方略が組み込まれていました。まず、授業の前に事前課題を提示し、学生は予習をして授業に臨んでいました。教員は授業開始早々、学生に2本のマイクをまわして資料を音読してもらいながら、「これはどう？ どうしてそう考えた？ 基準値は？」と発問や周辺知識の確認をしていました。次から次へと展開していく課題に、学生一人一人が一生懸命取り組んでいました。また、後半はグループワークをしましたが、話し合うテーマを学生達が決めて主体的に取り組んでいました。

動きのある授業展開で常に良い緊張感が維持されており、また学び合う学生の生き生きした状況を目の当たりにしました。今回の公開授業では、事前学習を上手く活用して発問やグループワークを取り入れることにより、学生自身で考える機会が多くなる『考える力』を育む授業の具体的な方法について考える機会となりました。

＜授業改善アンケート＞

授業改善により役立てることを目指してアンケート内容や方法を修正したことに焦点をあてて意見をいただきました。

～よりよい授業に向けて～

家政学科 熊谷 教



今年度より本学の授業改善アンケートは通年1科目以上とされ、終了期の選択回答式アンケートは平均点を計算する方式に変更されました。昨年度までアンケートの回答時期が集中し学生に負担がかかっているとの声があったので今年度はまた一步改善されました。

この授業改善アンケートが開始されて年月が経過し、アンケートを取ることや報告書としてまとめることは学内では定着してきたように思えます。私たち教員としてはその結果を授業に生かしているのでしょうか。自分を振り返ると、すべては活かせていない、と思います。学生から指摘を受けることや評価を受けることで改善できる部分もあります。しかし、伝えなければならなかったのに伝わっていない、学生は分からないまま終わっている、などの場合が気になってきています。アンケートの平均点が高い、ということではなく、わかる授業を作り上げることに取り組まなければならないと考えています。授業の本質をよりよくする、そのためにアンケートを活用しなければいけないと痛感しています。

中間期における自由記述形式の授業改善アンケートの意義

幼児教育学科 酒井真由子

近年、教師教育プログラムや現職教員の研修システムのうちに省察の技法を、教師の専門的資質に省察力を組み込むことが社会的要請となっている。高等教育に携わる教員も例外ではなく、学生に省察の技法を教え、省察力を身につけさせる者としてだけでなく、自分の授業をより良いものにしていくために省察力を身につける必要がある。

そこで、今年度の授業改善アンケートが自分の授業を振り返り、改善していく契機となったかどうか、もう一度省察する必要がある。「教える－学ぶ」関係である教育関係は、必ずしも教える側の意図が学ぶ側に伝わるとは限らない。教える側が「A」を教えようと思っても、学生は全く別のことを学習していたということはよくある。授業改善アンケートを行うと、「教員自身が思っていた評価」と「学生の授業・教員に対する評価」にずれが生じているのはこのためである。本学の場合、中間期の授業改善アンケートが自由記述であることで、教員自身が気づいていなかったことや反省すべき点、学生の意識とのずれを詳細に知ることができる。教員側の意図が学生に伝わっていなかったことに肩を落とすこともあるかもしれないが、中間期であれば授業の方法を変えたり修正したりする余地が残されている。授業改善アンケートの学生の記述（言葉）に耳を傾け、自分を振り返り、次の授業をどう展開していくか。これを繰り返すことが教育関係には必要である。

授業改善アンケート 振り返り ～今年度の修正点について～

看護学科 登内芳子

本学の授業改善アンケート実施目的は、「教員における授業方法や内容、及び学生の授業内容の理解度や受講態度の振り返りを通して、本学における授業を核とした教育活動をよりよい方向へ発展させることに役立てるため」としている。毎年、この目的を達成するためアンケート内容や実施回数、評価方法などが検討され修正が加えられてきた。今年度の主な修正点は、学生負担を考えて実施回数を減らしたこと、終了期のアンケート項目を「学生自身」、[内容]、[全体]についての三部構成にしたこと、その選択回答項目を「どちらともいえない」を除いた4件法としたことである。

これらのことで、学生評価の良し悪しがより明確になった、自由記述欄の記入が増え、学生が何を学び、何が満足につながったのか良くわかるようになったと感じた。さらに、「看護について良く考えるようになった」「看護への思いが強くなった」「看護って大変だけど素敵だと何回も思うことができた」「頑張ります！」等、授業内容の評価だけでなく、授業が看護に対する意識を高めたり、学習意欲を高めることにも繋がった事がわかった。学生の意見を聞くことは授業改善のためにとっても有用である。回数を減らすことで学生の回答意欲を高め、得られる情報が多くなったとすれば良いことである。実施科目が少ない点、担当教員が自身で評価する点などまだ検討すべき点もあるが、今回の修正点は良かったのではないかと考える。

キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果

庶務・財務課長 矢澤庸徳

今年で5年目になる本調査は、今回、能力知識の変化・教育への満足度といった面も加えられ、全学生対象に1月に調査が行われました（回収率は88.4%）。

職員の対応とサポートで点数が高かった項目は「図書館員の対応に満足している（3.5）」「教務課・広報課・財務庶務課の対応に満足している（3.3）」で、点数の低かった項目は「こころの健康を相談できる体制（2.7）」「からだの健康を相談できる体制（2.8）」でした。施設・キャンパス面では、「実習室の設備が整っている（3.2）」「グラウンドは充実している（3.2）」「図書館の学習環境に満足している（3.2）」等の点数が高く、「教室の空調の効きが十分である（2.5）」「自習スペースは十分である（2.7）」の点数が低かったです。能力や知識の変化では、「専門分野の知識が増えた（3.5）」「他の人と協力する力が向上した（3.3）」の点数が高く、「リーダーシップ能力が向上した（2.6）」「プレゼン能力が向上した（2.7）」が低くなっていました。教育への満足度では「専門科目の授業（3.3）」が高く「クラブや同好会活動（3.0）」「学習に関する支援・アドバイス（3.0）」が低く出ました。本学は専門職者養成が中心となっており、それが結果に反映されていると思われます。また、課外活動の時間がとりにくいのも、結果に影響していると思われます。学生生活への満足度では80.6%の学生が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答しており、過去最高の点数となりました。自由記載の回答で多かったものが、「冷暖房の改善」「駐車場整備の要望」でした。授業以外の勉強時間は、平日の平均が1時間39分で、学科別にみると、看護学科が2時間59分と最も高い結果となりました。

昨年と比較した場合、23項目で点数が上昇しており、提案箱の設置、早めの対応、工事に伴う利便性の向上などが影響しているのではないかと思います。下がってしまったのが、空調と図書館の学習環境でした。

過去5年間の変化では駐車場に対する満足度の向上が顕著であり、拡大・整備・指導等の効果があったと考えられます。因子分析の結果、3因子が抽出され、第1因子の学習成果満足の負荷量が最も高かったです。

今回の全体的な上昇の原因が何なのかは特定に至りませんでしたが、教育の改善、SD活動、提案箱、工事による環境の整備等が作用したのではないかと予想されます。改革等に取り組んだ項目は、やはり調査の結果にも反映されており、取組みの有効性が確認できました。また、学生満足度は能力・知識が向上するなど、自己の成長が大きく影響しており教育面の重要性が再認識できました。

編集後記

FD通信7号をお届けします。お忙しい中、寄稿してくださった先生方に感謝申し上げます。過去の通信を読み返しつつ、本号の原稿を読ませていただきますと、冒頭の委員長の言葉どおり、教員のFD活動への意識の高まりと、各人の中でPDCAサイクルが回転している実感があります。本通信に目を通していただくことが今後のFD活動の充実につながることを願っています。（文責：岩崎みすず）

飯田女子短期大学 FD 通信 No. 7 （発行日 2015 年 3 月 31 日） 編集担当 教務委員会

委員長 北林ちなみ

委員 岩崎みすず 及川直樹 小笠原京子 北林ちなみ 黒岩長造 近藤民恵 庄司洋江 千裕美 登内芳子 友竹浩之
※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp